

天安門事件から15年

激しく推移する時代の流れのなかで、十五年という年月は、歴史に刻印された衝撃的な出来事をもいつの間にか中性化してしまうのだろ。ましてや経済の急成長に先導されて巨大な変化を遂げつつある中国の場合、「民主が独裁か」といった疑問自体がもう不要なことと思われなくもない。

しかし、中国の歴史が始まって以来初めて皇帝型家長体制に対峙するかたちで「民主」や「人権」といった近代的価値意識を掲げて激しく異議申し立てを行なった大衆行動が、あの六月四日の「血の日曜日」の悲劇となった天安門事件は、まさに歴史の決算を済ませているとはいえないであろう。

なぜなら、事件の政治的決着はついているにしても、また天安門事件を代償に進襲した「改革・開放」路線の経済的効果がいかに大きかったにしても、最近



お嶋 純 雄
お嶋 純 雄
お嶋 純 雄

国際教養大学長・現代中国学 一九三六年、長野県生まれ。著書に『北京烈烈』『日中友好』という幻想『21世紀の大学』など。

経済成長 大きな代償も

民主化への試練続く

中国社会に見られるさまざまな文化の流行などは、すべて力の源泉を軍事力に求める「軍事物神崇拜」傾向とともに、中国という悠久の文明国家にあまりにもそぐわないように思われ、中国は天安門事件と引き換えに突に大きな精神的・倫理的価値を喪失したのではないかと懸念されるからである。

「中国における知の雪解け (Dagei de Yinrei Jigence en China 1976-1989)」が、夫君のクロード・カタール氏の協力を得てパリの有名なガリマル社から、つい最近刊行されたことによっても示されている。

フランスの代表的な中国研究者の一人として、カタール氏の共著『毛沢東二つの死』なども注目されたチェン女史は、毛沢東の死後から天安門事件までの期間を中国における「知の雪解け」の時代とみなし、

革を自指した陳一諮、天安門事件の前触れとなり、胡耀邦失墜の背景となった八七年の民主化運動のきっかけをつくった中国科学技術大学副学長(当時)で天文物理学者の方励之、一時は『人民日報』の編集にも携わり、ユニークな「陳外論」で注目された王若水、胡耀邦のブレインでもあった理論家・思想家の蘇紹智、『人妖の間』で知られた記者・作家の劉賓雁、もっとも激しく理論的に鄧小平独裁を批判した政治学者の戴家其ら、十四人の著名な反体制

このような思いは、決して私一人のものではないであろう。天安門事件の犠牲者を数多く受け入れてきたフランスの知識人やシンロジスト(中国学者)の間でも、そのような知的雰囲気は強い。それは、毛沢東の死から天安門事件までの現代中国の転換期における中国知識人の証言を究明に絞ったチェン・インシアン(程映淮)女史の浩瀚な編著

この間に旺盛な知的活動をとおこなった現代中国の知識人群像を照射し、その一人一人にインタビューを試みて、同時代史の貴重な証言として記している。

そこには、映画シナリオ『苦恋』で知られた作家の白樺、『北京の春』(一九七八年)で逮捕された魏京生の釈放活動に立ち上がった反体制詩人の北島、趙紫陽のブレインとして体制改

知能人が登場している。私自身もこれらの知識人の何人かと会っているけれど、その多くは天安門事件で逮捕されたり、国外への亡命をよぎなくされたりといった厳しい試練に遭遇した。戴家其夫妻らの活動に見られたように、海外亡命後は「民主中国陣線」を立ち上げて苦闘を重ね、一月一月にボストンで客死した王若水がそうであったように、中国民主化へのたた

天安門事件 1989年6月4日未明、民主化を求めて北京・天安門広場を占拠した学生・市民を、中国政府が武力で鎮圧した事件。かつて学生の民主化要求に理解を示したことが失脚した胡耀邦前総書記が同年4月に急逝したのを受け、学生などが展開した追悼運動が発端。当時の趙紫陽総書記は学生側に同情的な態度を取ったとして失脚した。なお、76年にも天安門広場で民衆と当局が衝突する事件があり、これと区別して「第2次天安門事件」とも呼ばれる。



かいをそれぞれの立場で継続はしているものの、彼らを取り巻く状況は容易ではない。

しかし、現代中国の良心でもあり、もっとも優れた知性だともいえる。これら知識人の問題提起は今日でも決して意味を失っていない。天安門事件自体が、いざれば必ず歴史の再審判を受けざるであらうだけに、事柄は依然として現在進行形だともいえよう。

そのような矢先、去る四月には天安門事件の一方の当事者として学生や市民の側に立ったがゆえに激しく批判されて失脚した趙紫陽が死の寸前にあるとの報道が一部で行われた。天安門事件直前のブルバチョフ・ソ連共産党書記長と趙紫陽との歴史的な会談は、ペレストロイカの旗手と民主化に敗北したリーダーというかたちで明暗を分けたが、現代史の一齣としては画期的なものであった。

趙紫陽の立場を支持したのは事件直前に反鄧小平を唱えて憤死したと伝えられる胡耀邦であり、今日の指導者である胡錦濤総書記も温家宝首相も胡耀邦の忠実な部下であっただけに、いざれば中国の指導者の側から天安門事件の再審判が提起される可能性もなきにしもあらずだといえよう。その意味でも天安門事件十五年は中国の政治と社会の変遷のうえで、一つの画期的な